

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K10952

研究課題名(和文) スポーツの存在様態とそこに潜む教育的意味に関する研究

研究課題名(英文) Research on the existence of sport and its latent educational meanings

研究代表者

越川 茂樹 (Koshikawa, Shigeki)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80338433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、古代ギリシアの運動競技の存在様態とそこにみられる教育的内容を明らかにすることを目的とした。その結果、以下のことが明らかとなった。1) 古代ギリシアにおける運動競技は、社交が深く関わっており、寛容の精神により「競い合い」と「互いの尊重」という矛盾した状況を克服してきた。2) 古代ギリシアの運動競技には、市民の共同体的まとまりという意味での国家であるポリスの形成を支えた自由でありながら平等が保証されている様態を示すイソノミア(無支配)という原理を実践的に経験できる構造があった。そして運動競技に触れることにより、ギリシア人はその原理とそこから生み出される意味ある教育的内容を学んでいった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

以下の点を考察した点に学術上の意義があると考えられる。1) 古代ギリシアの運動競技は、その社交性により日常の行動から遊びとして区別されていたこと2) 古代ギリシアの運動競技には、市民の共同体国家であるポリスの形成を支えた自由であり平等でもある様態を示すイソノミアという原理を実践的に経験できる構造があったこと3) 運動競技に触れることにより、ギリシア人はその原理とそれに伴う教育的内容を学んでいたということ

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the existence and educational content of athletic games in ancient Greece. As a result, the following points were found: 1) Athletic competitions in ancient Greece were deeply related to the human relationship of socializing. In this way, a spirit of tolerance naturally arose, and the contradictory situation of "competition" and "mutual respect" was overcome. 2) Athletic games in ancient Greece had a structure that allowed practical experience of the principle of isonomia (no rule), which indicates a state of freedom and equality that supported the formation of the polis, a state in the sense of communal unity of citizens. The Greeks learned the principle and the meaningful educational content produced by it through exposure to athletics.

研究分野：スポーツ教育学

キーワード：運動競技 競い合い 社交 寛容 イソノミア

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の学校体育においては、スポーツそれ自体の価値を認め、授業論・授業づくり論が形成され実践の展開に反映していく流れになって久しい。現在、「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現」という観点から、体育科・保健体育科における学習のあり方が問われている。その際、スポーツをどのようにとらえるかが、体育科・保健体育科における学習を計画し、実践していく上で影響を与えると考えられる。

今日、スポーツとは、自発的な楽しみを基調とする人類共通の文化であると理解されている中で、その存在様態の典型が「競争」であるに異論はないであろう。そしてそこに教育的意味や可能性が認められている。それは、スポーツにおける競争は、ルールによって守られた場での競い合いであり、その中で他者を尊重し自らの最善のめざし努力することによりわれわれは自らを磨いていくのであり、そうなることが望まれる（梅田，2005；山本，2016；ナウル，2016）というものである。一方で、競争が達成動機を高めるということは限定的である（コークリー，1982）、否、競争の価値に疑問を投げかける見解もある（コーリー，1994）。また、スポーツにおける競争という存在様態は、スポーツの社会における拡がりとともに、例えば、高度化の方向においてドーピングや暴力、不正等のさまざまな問題を生んでいる。それにより今日近代を推進してきた競争原理に対する反省がなされ、それに伴いスポーツにおける競争の意味と意義が問われる必要が指摘されている（濱口，2007）。

こうした状況から、スポーツの存在様態を問い直し、そこに潜む教育的意味について考えることは、今日の体育の学習のあり方を考えていく上で重要な課題であると考えられる。スポーツにおける競争は、ルールのある競い合いであり、その中で他者を尊重し自らの最善のめざし努力することによりわれわれは自らを磨いていくという点に教育的意味があると一般的に理解されている。それゆえ、体育の授業における競争型の運動の学びでは、「競い合い」と「互いの尊重」という矛盾した状況を克服する努力と工夫が求められる。この点について認識してはいるものの、実践においてはなかなか行動様式レベルで体得していくことは容易ではないようである。そこで、この点について考える手がかりの一つとして、スポーツにおける競争という存在様態の基底の一部とされる古代ギリシアの運動競技に着目する。なぜなら、古代ギリシアの運動競技は、「競い合い」と「互いの尊重」を融合させ独特の文化を育んできたからである。本研究では、運動競技において「競い合い」と「互いの尊重」がどのようにとらえられ、いかにして「競い合い」と「互いの尊重」という矛盾した状況を克服し、ギリシア文化の醸成の一翼を担ったのかを探ることとした。

2. 研究の目的

本研究では、古代ギリシアの運動競技の存在様態とそこにみられる教育的内容を明らかにすることを目的とした。そしてそれにより、今日の体育・保健体育科において求められる能力を育む上で大切となる視点を得ることをめざした。

3. 研究の方法

本研究では、目的に従い、以下の点について論究した。

- ①古代ギリシアの運動競技と人々の関係
- ②古代ギリシアにおける運動競技にみられる教育的内容

そして得られた知見から、「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現」という観点から体育科・保健体育科においてスポーツの文化的享受能力を育んでいく上で大切となる点について展望した。

4. 研究成果

本研究では、古代ギリシアの運動競技を対象にするあたり、古代ギリシアをホメロスによってまとめられたとされる紀元前8世紀頃のポリス形成時期からいわゆるポリス社会の時代としてその時代における運動競技と人々の関係を読み解き、そこにみられる教育的内容について明らかにすることを試みた。

①古代ギリシアの運動競技と人々との関係

古代ギリシアにおける運動競技は、英雄の葬送競技として、客人の歓待や宴会として、英雄や戦士の娯楽として、求婚者の選定のため、あるいは牧人や農夫の仕事の能率や楽しみのため等様々な理由で行われていた(岸野, 1984, p. 20). しかしながら、これらの理由を総合すると、それは社交という人間関係が深く関わっていた。そもそも人間は、生きていくためには、すなわち自分たちの生活を維持し、なおかつ平和で豊かに過ごしていくためには何らかの「つきあい」の形式をつくりだしていかなければならない(今村, 2000, p. 33). 人間は多種多様な「つきあい」によって共同的な生活を築いていく。とりわけ、古代ギリシアにおいては、「つきあい」は競い合いという行動様式によって支えられる中で日常的な暮らしが営まれていた。古代ギリシア人が、社会を競い合い(アゴーン)の原則の下で暮らしを切り開いていったことは、紀元前776年に第1回オリンピック競技会が半ギリシア的な行事として開催されそれを基準に暦が数えられていったことから窺うことができる。古代ギリシアでは、競い合いをアゴーンという語で表現していた。この語は、元々自分たちのことについて助言し合う自由人の男性の集會を意味しており、共通の神の庇護のもとで開かれたこの集會をきっかけに、市(いち)やスポーツ競技会も行われた(ベーリンガー, 2019, p. 41). アゴーンは、元の意味は集まることであり、広場や市場を意味するアゴラと関係がある(ホイジガ, 1889, p. 90; 関, 1982, p. 17). 加えて、訴訟や裁判を意味し、秤にかけるといった意味がみられる(関, 1982, p. 17). こうした視点から、当時行われていたとされる様々な競技のうちの一つである運動競技には、競い合いというどちらが勝つか負けるかといった秤にかけて、運動の世界における裁きを行うといった意味が内在していたとも考えられる。

古代ギリシアの運動競技は、社交の精神が人々の間に伝承され、暮らしの中に遊びの面の濃度を増し(Krüger, 2004; マルー, 1985; Dombrowski, 2016)文化として浸透していった。山崎(2006, p. 27)に従えば、社交の席で行われる競技は、ルールという粗筋に従う競争であり敵対行為であった。その限りにおいて真剣でなければならないが、遊びであることを理解し醒めながら勝負に酔う人が競い合う、付かず離れずに敵対者と向かい合うことが求められる。つまり、競争心は真剣であるべきだが、結果が相手の現実の打倒であってはならない。それが社交の競技であるからである。競技が成立するためには、対戦者が平等であることと双方とも勝敗に死活の利害を賭けない態度が必要であり、それは平等主義的で、敗北を致命的打撃とは考えない(関, 1982, p. 17)態度である。それは社交としての競技に相応したものである。運動競技は、社交を旨とした場において遊びになり、「競い合い」と「互いの尊重」という矛盾した状況を克服してきたのである。また、ギリシア人においては、競い合いを社会に秩序と平和をもたらす手段とすることを強いたとともに、競争と連帯を同時に意味していた(関, 1982, p. 19)。

ギリシア人は、ポリスという共同体をつくる上で、競争こそ連帯を生み出すという考え方に支えられた行動が重要であるという態度をとっていた。競い合いは、それが催しとして開かれる場では、主催者のもとに競技者は自ら参加を申し出て集まり執り行われる。そして、そこに集まった者たち皆によって勝敗が競われ決められ了承されていく。つまり、競争が連帯を生み出すそこに自ずと互いの尊重がある。それなくしては、競い合いが成立しないからである。この競い合いという「つきあい」には、自分の価値を他人に認めてもらいたいという欲望と他人に認められることによって自分自身を確認したいという欲望が原動力となっていた。そして、ここには「敵対と友好」(今村, 2000, p. 32)の関係があり、他者の良い面を認め、和合する寛容の精神を見とることができる。それによってギリシア人は、構造化された社会を支配する帰属と業績の原理に変えて、相互承認の原理の上に社会を創設することを求め、切り開いていく(関, 1982, p. 25)ことを競い合いという様式において実践していた。

②古代ギリシアの運動競技にみる教育的內容

古代ギリシアに成立したポリスの特徴は、構成員が共同で政治、軍事などの国の運営を担当する、いわば共同体国家というところにあった（桜井，2004，pp. 5-6）。また、この古代ギリシア人が生み出したポリスには、「その構成員のあいだに経済的・社会的に階層文化はあるものの、人格的な支配従属関係は相互のあいだに原則として存在しないことを特徴」（桜井，2010，p. 50）ともしていた。つまり、こうしたポリスの特徴は、それ以前のミケーネ諸王国のような中央集権的専制支配の国家ではない市民の共同体的まとまりという意味での国家であるということであった。ポリスは、それまでの氏族社会が血縁によって規定されていたのとは異なり、各人の自主的な選択によって成り立つ（柄谷，2020，p. 20）自律的なポリスとして多数形成された。つまり、氏族社会の原理を否定しながら、同時に、氏族社会に存する国家に抗する原理を回復するという出来事が生じた（柄谷，2020，p. 22）た。そこには、自由でありながら平等が保証されている様態を示すイソノミア（無支配）という原理が根底にあった。こうした原理に支えられた社会を、古代ギリシアにおける社交としての運動競技会、それに伴い遊びとしての意味を纏った運動競技は反映していた。運動競技は、そのつどの出来事であり、個人間の序列の決定は運と偶然を交えたゲームの過程自体と審判をする第三者によって判定され、そこでは、個人の能力や資質が特定の時と場所において特定の事柄を対象に一回限りで競われ、しかも個人の力量はその場の好敵手たちの力量と相対的であった（関，1982，p. 25）。

それだけに、こうした出来事としての運動競技がまさにイソノミアの思想を内に秘め、社交的關係において遊びとして行われ、社会的経験の機会を醸し出していた。そして、それが古代ギリシアの人々において隠れたカリキュラムとして学ばれ、当時の人々の考え方に影響を与えていった。市民は競技によって、闘争と連帯、自制心と他者への感受性を学んだ（関，1982，p. 30）。こうした点を、競技に触れる市民によって、ポリスが形成され維持される上での重要な内容として学ばれていた。つまり、運動競技は、社交といった人間関係の中で遊びとして行われ、競い合いという存在様態において、古代ギリシアの暮らしを平和で豊かに営んでいく上で求めた自由であるとともに平等でもあるイソノミアの思想が感知され、それに触れる場として大切にされ教育的内容を含んだものと意味づけられ親しまれていた。そして、そうした人々の運動競技の経験が暮らしの中の学びであり、暮らしを維持し充実させる術であった。さらにギリシア人は、競い合いに結果を当てにせず、ルールを守り、行っている競技に最善を尽くし、試練を受け入れることによって学ぶ自制心と、競技の勝敗は時の運であり、誰も永久に勝利を独占できないし、競技ができることは相手あつてのことであるといった相手への畏敬（関，1982，pp. 30-31）をも競技において学んでいた。

③スポーツを文化的に享受する力を育むことに向けて

スポーツは、競争の結果にこだわればこだわるほど、ルールを尊重するにせよ野蛮な方向に向かい、暴力や不正にまみれた活動となる。その一方で遊びの自由さ奔放さに流されれば流されるほど、一方的な、偏重した愉快、滑稽的なうわべだけの楽しさ、おかしさが助長されやはり品性を失い、結果つまらないものへと変質してしまう。緊張感ある競い合いを保障するために、持続するために、社交を旨として日常生活を分けられた遊びの内にある寛容によって互いが尊重され緊張感ある競い合いを生み出す。寛容さがなければ相手を徹底的に打ちのめすこと勝敗の結果において相手を徹底的に打ちのめす方向へと突き進んでしまう。誰をも排除しない、否元々排除するような状況の生まれない場であるからこそ互いが共生して暮らしているという状況が保たれているイソノミア思想を根に持つ古代ギリシアの共同体的社会の中では、運動競技が野蛮な方向に向かい、暴力や不正にまみれた活動に汚染される度合いを低く維持することができた。

こうした点を踏まえるならば、寛容の精神が、自由でありながら平等が保証されているスポーツの競争といった存在様態を支え、遊び心の根底に位置づいている限りにおいて、スポーツがその文化的可能性を拓き、個人の生が躍動し社会的な安寧への通路となると考えられる。ここにスポーツ

を文化的に享受する上で大切な視点がみられ、体育学習において重視する点として改め指摘される。

<引用文献>

- A. コーン (1994) 競争社会をこえて. 法政大学出版局.
- Dombrowski, D. A. (2016) Homer and competitive play. MacLean, M., Russell, W. Ryall, E. (Ed.) Philosophical Perspectives on Play. Routledge, pp. 107-119.
- 濱口義信 (2007) スポーツにおける競争の概念と理念についての考察. 同志社女子大学学術研究年報, 58 : 53-60.
- H. I. マルルー : 横尾壮英・飯尾都人・岩村清太 (1985) 古代教育文化史. 岩波書店.
- 今村仁司 (2000) 交易する人間 (ホモ・コムニカンス) 贈与と交換の人間学. 講談社.
- J. J. コークリー : 影山健他訳 (1982) 現代のスポーツ その神話と現実. 道と書院.
- ヨハン・ホイジンガ : 里見元一郎訳 (1989) ホモ・ルーデンス 文化のもつ遊びの要素についての ある定義づけの試み. 河出書房新社.
- 柄谷行人 (2020) 哲学の起源. 講談社.
- 岸野雄三 (1984) ギリシア・ローマの体育. 浅見俊雄・宮下充正・渡辺融, 現代体育・スポーツ体系 第2巻 体育・スポーツの歴史, pp. 17-30.
- Krüger, M. (2004) Einführung in die Geschichte der Leibeserziehung und Sports Teil I : Von den Anfängen bis ins 18. Jahrhundert. hofmann.
- ローラント・ナウル : 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム+つくば国際スポーツアカデミー監訳 (2016) オリンピック教育. 大修館書店.
- 桜井万里子 (2004) プロローグ. 桜井万里子・橋場弦編, 古代オリンピック. 岩波書店, pp. 1-15.
- 桜井万里子 (2010) 第1部 ギリシアの光. 桜井万里子・本村凌二, 世界の歴史5 ギリシアローマ. 中央公論新社, pp. 13-234.
- 関曠野 (1982) プラトンと資本主義. 北斗出版.
- 梅田靖次郎 (2005) スポーツにおける競争と協同についての研究. 九州保健福祉大学研究紀要, 6 : 179-187.
- ヴォルフガング・バーリンガー : 高木葉子訳 (2019) スポーツの文化史 古代オリンピックから21世紀まで. 法政大学出版会.
- 山本裕二 (2016) スポーツの“競い合い”を科学する. 体育科教育, 64 (2) : 10-12.
- 山崎正和 (2006) 社交する人間 ホモ・ソシアビリス. 中央公論社.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 越川茂樹	4. 巻 51
2. 論文標題 ホイジンガにおける古代ギリシアの競争の理解	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 釧路論集 北海道教育大学釧路校研究紀要	6. 最初と最後の頁 95-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 越川茂樹	4. 巻 52
2. 論文標題 ヘシオドスにおける人間観のスポーツの教育的可能性への接続	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 釧路論集 北海道教育大学釧路校研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------